

障がい者への偏見

青垣中学校 三年 蘆田 颯士

みなさんは、「障がい者」と聞くとどんなことを思いますか。また、障がい者を見るとどんなことを思いますか。人それぞれ思うことは違うと思います。そして、その思ったことが、無意識のうちに表情や態度に出ているかもしれません。

ぼくは、トゥレット症候群という病気です。体が勝手に動いたり、勝手に声が出たりする病気です。症状が出だしたのは小学校1年生くらいの時からで、年々症状がひどくなっていきました。

初めは軽い症状からでした。首をふったり肩をすぼませたりする動きぐらいでした。その時は周りの人に迷惑をかけるようなことはありませんでした。しかし、だんだん色んな症状が出てきて、教室でも机をどンドンたたいてしまったり、声が出てしまったり、給食をこぼしてしまったりといった症状が増えてきました。

小学校だったある日、担任の先生がぼくの病気のことについて、クラスのみんなに話してくださいました。最初は嫌だったけど、先生が話された後、クラスのみんなは病気のことを理解してくれて、ぼくは安心して学校生活を送ることができるようになりました。小学校が統合してからも、中学校になってからも、同級生のみんなは優しく接してくれました。

しかし、傷ついたこともたくさんあります。例えば、電車の中。体が動いたり、大きな声を出してしまった時、周りの人たちは決まって変な目でぼくを見てきます。何度も見てきます。外食するのに飲食店に行った時も、机をたたいてしまいます。コップもひどく机にたたきつけてしまいます。すると、やっぱり周りの人は変な目でぼくを見てきます。「ぼくだって、したくてしてるんじゃない。」といつも腹が立ってしまいますが、どうすることもできません。きっと、周りの人は無意識のうちに、変なものを見るような目つきになっているのかもしれませんが、でも、その視線がぼくにはすごく痛いのです。優しくしてくれとは思いません。ただ、「いろんな人がいるんだよ。」とみんなが思える世の中になればいいのになと思うだけです。

ある日こんなテレビを見ました。テレビには、ぼくと同じトゥレット症候群で悩む男性が出ていました。男性は、病気のせいでいじめにあったり、周りの人に変な目で見られたりして苦しんでいました。でも父親の転勤でアメリカに行った時は違ったそうです。アメリカは、個性を尊重する国なので、自分の病気を言っていると「ああ、そうなんだ。それじゃ仕方ないね。」と普通に接してくれるらしく、周りを気にせず生活できたそうです。

日本もそんな世の中になったら、ぼくみたいな普通じゃない人も、楽しく生活できるはずです。いろんな人がいて当然なんだと、みんなが思えるようになったら、みんなが幸せになれると思います。